



日本聖書神学校 學報

Japan Biblical Theological Seminary

〒161-0033 東京都新宿区下落合3-14-16・☎ 03-3951-1101 ~ 2・Email: jbs@jbs.ac.jp

2025年12月15日

第180号

発行人 神保 望
【後援会献金口座】
郵便振替:
00110-3-6435
加入者名:
学校法人聖經学園
日本聖書神学校



【巻頭言】

静かな夜

校長 神保 望

今号の内容

巻頭言	1
夏期伝道実習	2
ハラスマント防止講座	3
神学校を覚えて祈る集い	3
全校修養会	4

「さて、その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が現れ、主の榮光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。『恐れるな。私は、すべての民に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。』」

(ルカによる福音書2章8~11節)

降誕節に歌われる讃美歌に「きよしこの夜」がありますが、クリスマス・キャロルの一つとして有名です。ドイツ語原題は、“Stille Nacht”（静かな夜）です。“Stille Nacht, Heilige Nacht”（静かな夜、聖なる夜）と歌い出しますが、英語訳の歌詞“Silent Night, Holy Night”と同様です。しかし日本語訳では字余りになるからか、「静かな夜」は省かれています。羊飼いたちは、主の天使を通して福音を聴くと荒れ野を出立し、ベツレヘムのメシア降誕の馬小屋に辿り着きます。町の人々の喧騒とは隔絶した馬小屋の飼い葉桶にお生まれになられた乳飲み子は、静かな夜を照らす希望の光となりました。日本語訳では省かれた歌詞「静かな夜」は、福音を聴き目撃したことによって喜びと希望に満たされた人々の様子を最も良く伝えています。

2001年9月11日、ニューヨークにて同時多発テロが起きた時、私たち夫婦は日本基督教団海外派遣宣教師としてフィリピン国ルソン島北部のコルディレラ山脈（標高2,500メートル程）にある農村の教会（フィリピン合同教会）に派遣されていました。急逝された牧師に代わり私は代務者（協力牧師）、妻は音楽主事（聖歌隊指揮者）として任職されました。国内で最も涼しい高所で高原野菜を栽培し生計を立てる農民たちの日常は、静寂と平安に満ちていました。しかしこの静寂を破るように届いたのは、「第三次世界大戦が始まる」との噂でした。一切の電波が届かない地域にいた私たちは、噂の真偽を確かめることも出来ず不安に駆られました。暫くして、この噂

は麓の町でニュースを観た人の推測であることを知り安堵しましたが、地球規模で起こる出来事（大量の情報）から隔絶された地での静かな暮らしは、人々の心に平安のみならず不安と孤独をも生じさせました。

同年のクリスマスには、主のご降誕を感謝してささげられる礼拝と手作り料理を持ち寄っての愛餐会を行いました。この日だけは普段の静寂は破られて、夕刻を迎える頃まで教員の出入りがあり賑やかな雰囲気に包まれました。しかし楽しかった愛餐会も終了し教員と挨拶を交わし見送ると、私たちが暮らす丘の上の教会は再び静寂に包まれました。夜ともなると気温が下がり冷え込みますが、漆黒の闇に包まれた外に出て夜空を見上げると空一面に無数の星が煌めいており、時折走る流れ星の横を人工衛星がゆっくりと進んで行くのを飽きることなく見つめました。そして月明かりに影を落とす丘陵地帯のはるか彼方に目を転じると、そこには少しばかり点在する小さな家々の灯りが見えました。おそらくは、家族のみで祝われるクリスマスの夜を楽しんでいることでしょう。北部ルソンの山岳地帯にある小さな農村に暮らすようになって約一年。クリスマスの静かな夜に思ったことは、遙か彼方にある日本をはじめ世界の諸地域で起こる出来事（大量の情報）から隔絶された地に暮らすことは一抹の不安や孤独はあるものの、静かな夜だからこそ聞くべき大切なものが何であるのか、はっきりと示されたように思います。星に導かれて夜道を進んだ羊飼いたちは、ベツレヘムの町の喧騒の中にも御子の降誕を目撃し福音を信じました。「静かな夜」とは、福音を聴くに最良の時として理解することが出来ます。

現代社会には音が氾濫しています。しかし羊飼いたちが主の天使の言葉（福音）を聴き星に導かれてベツレヘムへと到着し目撃したメシア降誕の出来事は、喧騒の中であれ静寂の中であれ、何よりも優先して聞くべきものは福音（良い知らせ）であることを伝えています。

夏期伝道実習

共生をよろこぶ

私は那須塩原伝道所とアジア学院、アウシュビツツ平和記念館、栃木県北地区教会合同キッズデイキャンプへ、合わせて1週間のプログラムで夏期伝道実習をしてまいりました。

避暑地の那須塩原も今年は30度を超える猛暑。実習初日には、今野善郎牧師、マッカーリー牧師が農作業初心者の私のために祈ってくださいました。

アジア学院にて今年は17ヶ国から29名の農業指導研修生がおられ、礼拝や集会の後に農作業を行います。先生や学生がたが私に根気強く農業技術を教えてくださいました。特に印象深かったのは、1メートルほどの雑草と大豆の苗を見分け、2時間かけ雑草を抜き続ける作業です。これは私にとって「毒麦のたとえ」を思い起こす貴重な出来事でした。

作業後は、採れた食べ物を囲み、多くの学生と英語でそれぞれの文化について語り合いました。多文化共生のな

酒巻百合恵（3年）

かで食と農を繰り返す日々を心から喜びました。

キッズキャンプ場に向かう途中、道に迷い、電話をしていると、子どもたちがそれに気づいてキャンプ場まで私を案内してくれました。キャンプは子ども23名、大人20名が参加。礼拝では平和と戦争をテーマにした説教、歌って踊る賛美、鳩を描く分級の時間がありました。夜はバーベキューと花火大会。翌日は朝4時から子どもたちと走り続けました。

アウシュビツツ平和記念館（白河市）では、強制収容所の記録、ユダヤ人解放に命をかけた人々の証言、アンネ・フランクの生涯に触れました。ホロコーストの深い痛みと向き合い平和の実践を体感することで、私の祈りをさらに深める機会となりました。

最終日、私は今野牧師のご指導のもと、那須塩原伝道所でマッカーリー牧師の同時英語通訳とともに説教奉仕を



行いました。賛美歌も対訳プロジェクトが用意されており、アジア学院のかたがたもよく来会されること。帰宅時、新幹線の大幅な遅延という現代社会の問題に直面しましたが、教会の皆様の温かいご配慮に励まされました。

創造主は、ともに生きるための協調性をすべての被造物に与えておられます。今回の実習は、農作業から子どもたちとの関わり、説教奉仕に至るまで、私に必要なすべてを学ぶ有意義な機会となりました。ご支援くださった皆様、そして、イエス・キリストに感謝いたします。

私にも故郷が出来た！

神学校3年の夏には、神学生養成の一環として、1週間ほど夏期伝道実習が計画されている。私には、8月5日（火）～11日（月）の間、松本市にある、松本教会が与えられた。

夏期伝道実習の出発前から私には一つの悩みがあった。それは、6日（水）午前中の祈り会での証でも、主日礼拝・夕拝の説教奉仕でもなく、7日（木）から二日間の、「子ども夏のキャップ」であった。何故なら、子どもたちとどう向き合い、遊ぶかが、私の一番の悩みだったからである。

「子ども夏のキャップ」の初日、明け方から9時頃まで雨が降ったので、雨天時のプログラムに変わった。午前中の移動、礼拝、川遊びのプログラムを変更して、教会で礼拝、くす玉割り、折り紙、自由行動、そして、14時頃、キャンプ地へ移動となった。

私の心配とは裏腹に、松本教会の子どもたちとは、驚くほど、急に親しく

宋 度栄（3年）

なった。くす玉割り用の紙のボールを投げる遊びを始めたら、子どもたちが楽しく参加し、それを皮切りにして、押し相撲など、二日間、子供たちと楽しい時間を過ごすことが出来た。おかげさまで、一週間ほど、筋肉痛になつたが、それは松本での素晴らしい思い出の勲章だった。

キャンプファイヤーの時の猛獣狩りゲームが楽しかったという感想文をもらい、キャンプ出発の前日、真夜中だったが、そのゲームについて教えて下さった柳谷先生に、感謝する気持ちでいっぱいである。帰りのバスの中では、小3のひなたちゃんから「来年小1になる弟を連れてくる予定だが、度栄も来る？」と何度も言われた。また、小5の一花ちゃんから「松本教会にまた来てね！」という文面と住所付きの手紙ももらった。子供たちと親しくなつた証しだと思われ、今も嬉しく思っている。



松本教会は本当に心温まる共同体だった。柳谷知之先生と毎日、ご飯を共に食しながら、信仰及び人生について、時には、先生のギター演奏を聞きながら、先生の珠玉の様な牧会の体験談を聞くことが出来、とても有益であり、夢のようなひと時であった。子どもたちの無邪気な姿には、心がシャロームとなった。たった1週間だったが、思い出がいっぱいである。自分にも故郷ができた感じがする。松本教会共同体に神の平安と加護がこれからもずっと共にありますように。ハレルヤ！アーメン！

ハラスメント防止講座 – 全校共通総合演習 –

2年 大島泰江

本年度のハラスメント防止講座は、「教会におけるハラスメント防止研修」～安心して集るために～と題して、日本同盟基督教団人格尊厳委員会の大杉至先生（伊那聖書教会牧師）を講師にお招きして開催されました。会には学生だけでなく、先生方、職員の方の参加もあり盛況でした。

先生は最初に、このセッションの目標は、「あなたが相談できる人を決めておきましょう」であると呼びかけられます。ハラスメント問題は内容も文脈も多岐に渡り、「ハラスメント」のイメージが一人歩きをすると、有効な対策が取れない可能性があること、「ハラスメント」という言葉を固定的に考えず、大切なのは「何が問題なのか」がわかること、そしてその対策につい

て、今から考えておくことだと話されました。現実には10教会に1教会の割合で、中程度以上のハラスメント問題が発生、どの教会でも一定頻度でハラスメント問題は起こるため、発生を想定し、初動をイメージし、相談できる人や組織を今から決めておくことが必要、特に初動（初期対応）が大切であるというのです。

そして聖書から、人格尊厳を「神は人を自分のかたちに創造した。神のかたちに人を創造し、男と女に創造した」（創世記1:27）、包摶性を「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隸も自由人もなく、男と女もない。あなた方はキリストにあって一つだからである」（ガラテヤ3:28）。仕えるリーダーシップとして：「異邦人の支配者は権力を

ふるっている、しかしあなた方は皆に仕える者になれ」（マルコ10:42～43）を挙げられ、ハラスメント対策は神の愛から来るものであると示されました。

『教会の中にも』ではなくて、『教会の中だからこそ』ハラスメントが起こるという視点に立って、ハラスメント対策を自分事として受け止めることが重要であることを改めて心に留め、そして起こさないための予防、おこったときの初動、被害を拡大しない対応に務めるべきこと、この3点をどう具体的に実践していくかが、わたしたちに求められていると学ぶことができました。

「日本聖書神学校を覚えて祈る集い テゼの歌による黙想と祈り」 感謝のご報告

教授 水谷 勤

今年度も、「日本聖書神学校を覚えて祈る集い – テゼの歌による黙想と祈り」が、神学校後援会や同窓会の皆さんに支えられるなか、10月9日（木）に行われました。今秋で二回目の開催となりましたこの会には、誰でもが参加できる行事としてより多くの方々に神学校を知って頂き、さらに伝道者養成の働きに関心を持って頂き、共に祈りを合わせる機会を持ちたいとの願いが込められています。今年も上垣勝先生（教団・隠退教師）に会のリードを、そして奏楽を鈴木敦子様（搜真バプテスト教会オルガニスト）にお願いし、テゼを通して再び皆様と共に賛美の祈りを合わせることができました。



会に先立ち、挨拶と神学校紹介が、校長、後援会長、そして神学生により為された後、テゼ共同体のスピリットが伝わるお話を上垣先生より伺いました。戦時中の厳しい状況下において、信仰の灯火が共同体形成につながっていったという内容が参加者に強く印象に残ったこと思います。テゼの時間ではその特徴ある賛美において皆が一つとなり、励まされ、それと共に比較的長い沈黙の時間をも持ちます。私たちを取り巻く社会情勢には大きな変化があり、多くの不安を強いられる状況のなかにあることを思いつつ「…天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」マルコ13:28-31とのみ言葉が、聖書協会共同訳、韓国語、ケセン語聖書により朗読されました。また分団の時間を通して、それぞれが受けた恵みを分かち合いました。

今年も上垣先生と鈴木様には事前準備の段階からご尽力を賜り、神学生た



ちを温かく励ましてくださいました。そして神学生たちも、証し、賛美、聖書朗読、祈りの奉仕においてそれぞれの賜物が用いられ、神学校という共同体の場に与えられた一人一人の存在を感謝する時でもありました。今回は、全体で51名の参加が与えられ、中には献身を考えておられる方や、泊まりがけでご遠方から来られた方もおられ、この会が多く卒業生や関係教会の皆様に覚えられていることを改めて思わされました。皆様の篤いお祈りによるお支えを、誠にありがとうございました。

全校修養会

教授 細井茂徳

10月24日(金)～25日(土)、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、「教会」をテーマとした全校修養会が行われました。正科生全員が参加する必修科目であり、授業の一環として1泊2日の日程で実施されました。今年度の半年が過ぎ、特に4年生は卒論に向けた追い込みの時期もあり、神学生たちにとって心が揺れ動きやすい時期です。いっとき日頃の学び舎から離れた静かな環境の中で、自分の内面を深く見つめ、友と語り合う機会として組み込まれたプログラムです。これまでに得てきた多くの気づきを振り返ることで、神学生たちが改めて安心感を覚え、心の支えを得る機会を提供することを目的としています。

教授会では、準備の段階で以下のテーマが話し合われました。「教勢の低下」という問題への取り組み」「教会がどのように育つかといった成長への関心」など、こうした状況下で希望を持つ教会として何をすべきか、いま神学生として学ぶ必要のある点について検討し、その学びを実現するためにワークショップ形式のプログラムを取り入れました。さまざまな教派の視点から今回の修養会の主題を明確にすることを目指し、新たな試みとして修養会に先立ち、10月20日(月)の全校共通総合演習の授業を充てました。北海教区美唄教会の久世そらち先生よりオンラインで「地方教会における宣教の課題について」講演していただき、現実を見据えた教会のビジョンに学ぶところから始められました。

一日目。午後6時に会場ロビーに集合し、講師との顔合わせや夕食を通してプログラムが開始されました。今年は、日本基督同盟教団・多磨教会の朝岡勝先生をお迎えし、「『教会に生きる喜び』を巡って」と題した講演をしていただきました。牧師家庭に育った朝



岡先生の生き立ちや、これまで仕えてこられた教会・神学校での経験を交えた分かりやすいお話を印象的でした。ご自身の体調を崩し挫折を経験されたこと、それぞれの教会に個性と多様性があることを紹介されたうえで、「説教において神の御言葉が語られることの大切さ」を強調されました。「『羊飼いの声に聴く群れ』として教会は整えられ、自由と喜びに生きられるようになる」との力強いメッセージを聞くことができました。さらに、「教会がアンプ・スピーカーのように世界に響いていく存在となるよう、目の前の人だけでなく世界に向かって説教している」と語られ、講演は締めくくられました。質疑応答では参加者から積極的に意見や質問が寄せられ、神学生の声に耳を傾ける貴重な時間となりました。

二日目。朝7時から、小雨が降る肌寒い野外広場で「朝の祈り（朝礼拝）」が行われました。1年生が企画・準備し、今井由貴子神学生が「日本聖書神学校に生きる喜び」を証しました。朝食後、ワークショップが始まりました。菅原教授と柳下教授から、それぞれの教派の視点から「教会」について30分ずつ発題していただきました。続いて三つの分団に分かれてディスカッションを行い、4人の先生方から伺った話の感想を自由に語り合いました。全体会では、各グループで話し合った内容を報告してもらい、「北海地区における教会間の互助や連帯の話が印象的だった」との感想や、「まず礼拝に集中し御言葉に誠実に向き合うことで教会は整えられ、たとえ牧師が健康



を崩しても教会が支え励まし続けてくれた経験にこそ教会の可能性が見いだされるのではないか」との意見も聞かれました。また、「神学校でのあり方が教会のモデルとなり得るのではないか」との意見もありました。さまざまな意見を交わし、コミュニケーションを深めることで、体験的に学ぶひとときとなりました。最後に、荒瀬教授による閉会礼拝をもって修養会を締めくくりました。

今回の修養会では、講演やディスカッションに加え、神学生が主体的に計画・参加する機会（朝礼の企画、夜の交流など）も設けられ、有意義な二日間を過ごすことができました。無事に会を終えることができたことを神に感謝し、この修養会で得た経験を生かして、神学校でのさらなる信仰の学びを築いていきたいと願います。全校修養会を終えて、近い将来遣わされいく神学生たちが各自のテーマである「教会」に対する答えを見いだしていくことが期待されます。未来に目を向けて、教会の意義を探求しながら、引き続き学びを深めていきたいと思える修養会でした。

2026年度2月入学試験（正科生）

★出願期間

2026年1月5日(月)～1月30日(金)

★試験日

2026年2月20日(金)

★受験資格

1. 大学卒業者またはそれと同等の学力を有すると本校において認められた者。
2. 受洗後2ヶ年以上的忠実な教会員であり、伝道の召命を受け、所属教会牧師と役員会の推薦する者であること。

■願書のご請求は本校まで。